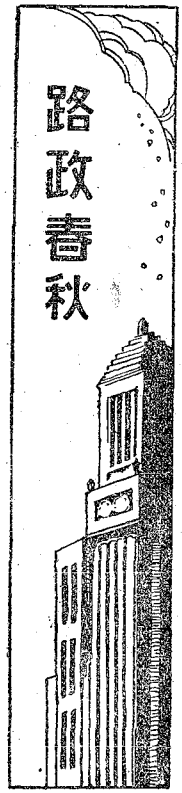


注意

本欄は讀者諸氏の利用に提供す、治安と風俗とを害し又は人身攻擊に渡らざる限奇想天外的の寄稿を望む、一文は四百字位にて取捨は編輯子に一任、原稿は道路の改良編輯部宛のこと。

科學のメスは錦帶橋が最優秀なるを辨證す

橋梁が洪水に依つて流失し交通に甚大なる障碍を生ずるのみでなく時に幾多の慘事さへも生じ勝ちである。然るに橋梁の下部構造に對し何等科學的メスを下さず頗る寒心に堪へない現狀である。之を慨し六年前から京都帝國大學工科土木學教室石原藤次郎助教授が「橋梁倒壞の原因と豫防對策」の研究を續けられ、此程其成果を發表された。則ち、石原助教授は先づ橋梁の倒壞流失の最大原因は橋脚の河床が水流により洗抉される點にある事を指摘、洗抉の科學的進行狀況と豫防措置を精密な數字により明示した上、從來單純に考へられてゐた橋梁の流線型採用位では到底急流の洗抉に對抗出來ぬ事を明にし、橋梁は先づ流れに對し尖らせた前頭部を面せして後頭部を丸くする事、又橋脚の長さは大した影響は齎らさぬが可及的に橋脚數を少くし、且つ水流に併行させる事（地理的關係から斜橋の已むなき場合は水流と橋の角度を五、五度以内とす）等々を力説した。又、石原助教授は同時に河床の脆弱性からどうしてもこれらの方法を採用し得ぬ場合を考慮し、捨石法等直接防護法も完成したが資源保護の國策的立場からも本法を採用周到な設計上の考慮を拂ひさへすれば橋梁は絶對に流失せぬ事を斷言、從來巨費の割合に效果の薄かつた橋梁建築の惱みを一掃した。石原助教授の廣汎な研究によつて全國橋梁中最優秀とされるのは岩國の錦帶橋で、錦帶橋自身も架橋以來十數回にわたり流失し地方民の惱みの種となつてゐたが、約二百七十年前の延寶元年、時の岩國藩主吉川廣嘉により苦心改築の結果再び流失を繰り返さぬやうになつたもので、遠く德川時代に今日の科學檢討と同一の效果を擧げる實驗がなされた事は興味に價すると。實に興味津々たる報告である。

何んと木炭車の偉力は と大阪府交通課の試み

大阪府交通課では國策線に沿つて啓蒙す

べく五月十五日各種薪炭自動車二十一輛の轍をつらねて北攝山間部を强行突破する全行程七十一キロの大規模な實地講習會を行つた。午前九時大阪四ツ橋實業協會に市バス、青バス、大交、相互兩タク、赤玉トラックをはじめ府下で十輛以上を所有する大口自動車運輸業者約百七十名を集め、同課松本技師、山本一般交通係長より要旨說明ののち、一行は十發生爐製作工場所有のバス、乘用車、トラック二十一輛（木炭車十五、薪車六）に分乘して出發、長蛇の列をつくつて市中行進の後、三島郡三島村より特にコースを急坂九十九折の龜岡街道に選定し「果して登れるか？　登れぬか？」と敢然性能テストを挑みかけた。道は次第に狹まり、もつとも險峻な箇所では六分の一といふガソリン車でも苦しむ急勾配だが、これを悠々突破し豐能郡餘野村まで、丹波國境近いの難路十六キロを見事一時間で征服して凱歌をあげ、午後三時半豫定よりも一時間も早く目的地池田市公會堂に到着した。事故はタイヤのパンク一件のみといふ大成功で薪炭自動車の底力を遺憾なく發揮したと云ふ試驗の結果を見たと。時節柄適切な試みである。

本土から九州へ一足飛びの自動車專用道の計畫は實現へ

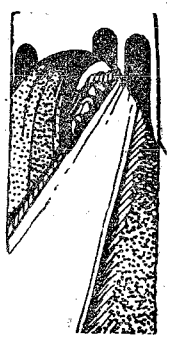
關門隧道が交通運輸界に於ての劃期的偉業と稱せられて居るが、之に伴ふて一大革命的計畫、即ち本土の岩國から九州福岡へ一足飛びに快走道、即ち自動車專用道路の築造が目論まれることになつた。夫れは山陽線岩國より德山、三田尻、小郡、下關飛行場と鐵道沿線に並行して海岸線を傳ひ長府、前田から舊壇ノ浦、關門海底トンネル下關口に結び海峽を橫斷して門司市舊門司に現はれ、小倉、八幡、折尾を經て一直線に福岡に至る第一案と、岩國より本郷、須萬、鹿野、堀を經て山口縣廳前に出で、吉敷、大田、伊佐、萬倉、厚保、吉田から小月に現はれる山間部コースをたどつて淸末より王司、勝山、川中と裏下關を眞一文字に彥島へ渡り、田ノ首から海底トンネルを通じて門司市大里新町に現はれ第一案のルートを進み福岡に向ふ第二案と、さらに兩案の折衷案である海岸線を小月まで傳ひ淸末附近より裏下關を經て彥島より大潮海峽の海底を橫斷、門司市大里から福岡に至る三コースが選定されてある計畫である。靑森函館間に隧道を築造し關釜間海底トンネルと相俟つて日本と大陸とを完全に連結する日も決して妄想とは見られまい。

鐵道隧道にも斯く惱あり

鐵道關門トンネルは十六年三月までに開通の豫定であつたが斷層突破のため工程が遲れ、十六年末か或は十七年當初に開通時期の繰延を餘儀なくされるに至つた。從つて工費一千二百萬圓、三ケ年計畫の增設トンネルはたとひ要求通り十五年度に豫算が

實現するとも技術者ならびに資材關係の制限をうけ、二本並行して工事を遂行することは困難となり、一方これにより九州―本土間の輸送計畫は相當廣範圍にわたる修正の必要を生じ最も深刻な影響を蒙る下關運輸事務所ではこれが對策を急いでゐるといふことである。

あるかなきかの珍聞奇譚(27)

○謎を秘めたる古代文字　北海道宗谷線音威子府茨内四線三十七號農上野德太郎氏所有畑地から今回發見された。古代文字はその系統が如何なるものであるか各方面の好奇心を集めてゐるが、この文字の解讀及びその系統の發見によつて從來本道で見出された諸文字手宮韃靼文字、フゴツペ文字、アイヌ民族のエカシ、シロシ（民族證）或は石繪等への所屬が明らかとなり從來のそれへも何らか更にはつきりした光明を與へるものと見られて居る。文字石の發見者は上野さんで、大正四年移住當時「何か書いた重い石」を投げ棄つべく遂に果さず今日まで畑の一遇に轉がして居たもので、たまゝ音威子府田附校長及び考古學の研究家同校訓導近江一君が數日前にこれを取りあげ村長の實地踏査となつたもので、原石は水成岩三尺五寸に三尺大、三段段丘の最上部に所在、しかも三つの丘狀チャシの中間に位置して居る、音威子府附近は松浦武四郎安政四年六月七日の踏査日記に見るもアイヌが相當多數住居し、系統は天鹽アイヌであつて從來音威富士背面の斷崖より古土略、刀劍の發見されたこともあり、該石文字はアイヌ民族の何かの意思表示であらうことは誤りない所であらう。田附、近江兩先生は、トオイネップと云ふのは物靜かな冬の澤と云ふ意味で、このチャシの所在する茨内附近を指し筬島（オサシマ）と云ふのは凹凸のある乾いた土地と云ふ意味で、現音威子府市街の入口を指したものらしい。松浦日記にある佛法僧の鳴聲は響平、音威子府、筬島一帶に聞えるもので、地相から云へば筬島は音威子府ではないかと見られる。

又古老の話によるに、同地今野泰藏氏は市街入口あたりから金を鏤めた刀二振、陣笠、丸木船を掘り出した事實あり、最上德内、間宮林藏等探檢家のアイヌへの贈物又は遭難者の遺物かとも云はれ、アイヌ民族繁榮を極めた土地であるのは疑ひなく、文字の解讀は本道考古學界に相當寄與するところあるものと期待されてゐる。（北海タイムス）